

5. グループディスカッションを踏まえた全体討論

(1)趣旨説明と話題提供

金井 昌信（群馬大学大学院 准教授）

今回のグループディスカッションでは、二つのテーマについて、グループで議論して頂きます。一つ目は『児童生徒の心に響き、行動を変える授業とは？』で、二つ目が、『地域と連携した防災教育』です。前回、田辺市で開催させて頂いたときにも、二つのテーマで議論させて頂きました。一つは「防災教育の為にコミュニケーション力」、もう一つは『地域と連携した防災教育とその継続』でした。今回のグループディスカッションは、前回の議論を踏まえて、更に深掘して議論することを目的としています。前回参加されていない方もいらっしゃるの、まずは前回の議論から一体どんな事が知見としてえられたのかを、私の方から話題提供させて頂きます。前回の議論から、効果的な防災教育を構成するポイントを3点に整理してみました。

一つ目は、『授業の内容・位置付けの転換』です。何でもかんでも教え込むのではなく、子どもたちの防災を通じた“学び”から、自分たちの問題、地域の問題であるという“気づき”を引き出すような授業、問いかけがまずは大事だということが指摘されていました。

次のポイントは、『家庭・地域と連携のそのあり方の見直し』です。子どもたちの“気づき”から具体的な“実践”につなげることです。ここでは、何でもいいから家庭や地域と一緒にやるのではなく、子どもたちへの教育効果を高めるという観点から、連携のあり方を考えることが重要だということが指摘されていました。

そして、最後のポイントは、『継続的な防災教育の実施体制の構築』です。“実践”した結果から、子どもたちに「さらに何かやりたい」「もっと知りたい」というやる気がでてきたときに、それを次の“学び”につなげる。さらにその新たな“学び”から新たな“気づき”を促し、そしてその新たな“気づき”から新たな“実践”を促す。このようなループを切れ目なく回していくために、それぞれの学校の実情に応じた防災教育カリキュラムを構築することが必要だということが指摘されていました。

このループと子どもたちに見られる教育効果との関係をまとめると図のようになります。

今までの防災教育は、座学として防災に関する知識を与えるような授業が多かったと思いますが、これだけだと「教えられる知識を得る」というだけの“受動的な学び”になる。そこで、命を意識させたり、子どもたちの心に葛藤が生じるような“心をゆさぶる発問”をすることで、座学を通じて知り得たことは、「自分たちに関係する問題なんだ」という“当事者感”“わがこと感”を高め、災害と対峙している自分に“リアリティ”を与える。そして、その問題の解決策を考えることを通じて、“命の大切さ”家族や友達、地域の人といった“他者を思いやる心”を育む。ここまでが一つ目の段階です。

対策を考えたら、そのあとは「じゃあ、みんなでやっぺいこうね」と単なる努力目標とせず、具体的な実践につなげていく。そして、実践につなげていくのは、学校だけで対応することに限界もあるので、そこで初めて“家庭や地域との連携”が具体化してくる。そして、地域の大人と一緒に具体的な活動を行うなかで、子どもたちは自分の考えを伝えたり、みんなで協力して物事を行うことなどを経験する。これらの経験を通じて、子どもたちに“コミュニケーション力”が身につく。さらに、子どもたちの実践をただやっただけにせず、地域に還元する、他者に伝える活動も行う。そして、子どもたちの行った活動に対して、家庭や地域の大人から評価してもらう。大人たちからポジティブな評価を得るこ

とで、子どもたちの“自己肯定感”や“自己有用感”が高まる。そして、「もっと自分たちにもできることがいろいろあるんじゃないか」と、地域に貢献したいという欲求が高まる。ここまでが二つ目の段階です。

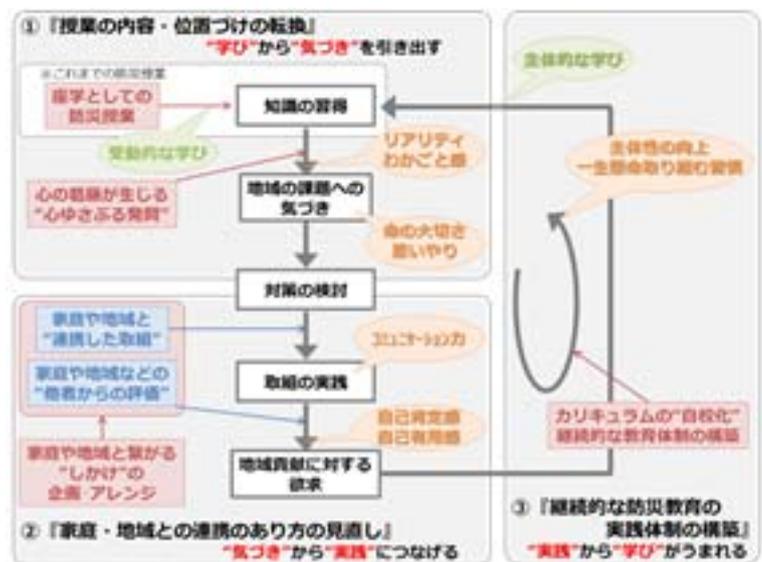
「もっと地域に貢献したい」、「でも何をしたらよいかわからない」となると、子どもたちは自ら主体的に知識を得ようとする。すなわち“主体的な学び”がうまれる。そして、新たな“知識”を得て、新たな“気づき”があり、新たな“実践”につながる。このループが継続的に回り続ける仕組み

を各学校に構築することが必要で、そして、このループを回していくことで、子どもたちの“主体性”は向上し、また“何事にも一生懸命取り組む習慣”が形成される。これが学力向上につながる要因の一つではないかと思います。これが三つ目の段階です。

先ほどの3つの事例発表をお聞きしていても、この3つのポイントは間違っていないのではないかなと思います。そして、このような観点に至ったときに、グループディスカッションの二つ目のテーマ『地域と連携した防災教育』とはどうあるべきなのか。これまでに先生方はいろいろな活動を実践されてきたと思います。例えば、「保護者と一緒にまち歩きをして、防災マップを作りました」とか、「保護者参観で防災マップの発表会やりました」とか。そういった活動のどこをどのように工夫すれば、より効果的な実践になったのか。防災に関わる場所以外の教育効果として、思いやりが高まったとか、コミュニケーション力高まったとか、一生懸命やる子になったとか、そういった教育効果が得られたという事例と比較することを通じて、具体的な内容を議論していただくのが、テーマの二つ目でございます。

もう一つのテーマは、先ほどのポイントの第一段階として、災害や命に対する“リアリティ”や“わがこと感”を高めるために、どういう発問、投げかけがありえるのか、という点です。座談会でも紹介されていましたが、すでに黒潮町では、「命の教育」ということで、命を題材にした授業の実践が始まっています。「命の授業案」という資料の二つ目と三つ目がその授業案です。そして、その資料の一つ目にある授業案は、和歌山県田辺市の小学校で実際に実践して頂いたものです、同様の授業を実践された先生が何人かいらっしゃるのですが、かなり難しいと聞いているんですが、こういう事例を参考にし、子どもたちの“わがこと感”や“リアリティ”を高めるためのポイントを具体的に考えていただきたい、というのが一つ目のテーマです。

しかし、“命の教育”といっても、なかなか実感湧かないし、イメージしづらいところもあるかと思いますが、そこで、この資料の一つ目の授業案を、田辺市立芳養小学校の太田先生が実践されたときのビデオがありますので、それをご覧になっていただきたいと思います。映像は45分の授業のうちの最後の10分間です。





太田 自分の命を守るために、次のような状況を想定をしてください。

「あなたの大切な人が避難できない」状況です。怪我をしているかもしれない。何かに挟まれているかもしれない。要するに、避難しようにも避難できない状況です。動けなくなっているのは、自分にとっても大切な人です。家族の誰かかもしれない、それは自分で決めてください。そして、「すぐに津波が来るかもしれない」状況です。

このような状況のとき、そばにいるあなたはどうしますか。「自分はこういう判断をした」というのを聞きたいと思います。

児童 A 僕は、家族とかを助けられなかったら、ひとりで高いところまで逃げきって、大切な家族が生き残ってくれることを祈ります。

太田 逃げるほうですね。逃げるんだけど、逃げ切ってから家族の無事を祈る。他に「逃げるよ」って人いますか。

児童 B 私は逃げる方を選びました。もしも助けられたとしても、すぐ津波が来ているから、どっちも助からない。

太田 どっちも助からないと。みんなの判断を見ると、「逃げる」って方が結構多いみたいです。だけどその中でも、「逃げない」っていう人もいます。ちょっと聞いてみたいと思います。

児童 C 僕は大切な人に、「逃げて」と言われたら逃げます。でも、何も言われない場合は一緒にそこにいます。理由は、その人を一人だけ死なせるのは本当にいやだからです。「逃げて」と言われた場合は、その人は死ぬかもしれないので、その人の言うとおりにします。

太田 大切な人を死なせるのはいやだ。一緒にいます。同じ意見の人がいたんで、聞いてみますね。

児童 D 大切な人だから、津波が来るまでに助けられないと思うけど、その場に一緒にいます。それは大切な人だから、自分だけ見放して逃げるのは駄目かなと思うからです。

太田 はい。代わりに言ってくれます。谷本さん。

児童 E 私は、自分だけ助かるのは、自分だけが助かるのは、あとでいやだからです。

児童 F 僕は、相手を謝ってからすぐ逃げます。理由は、相手は絶対助からないと知っているけど、最後に逃げることを謝っておきたいからです。

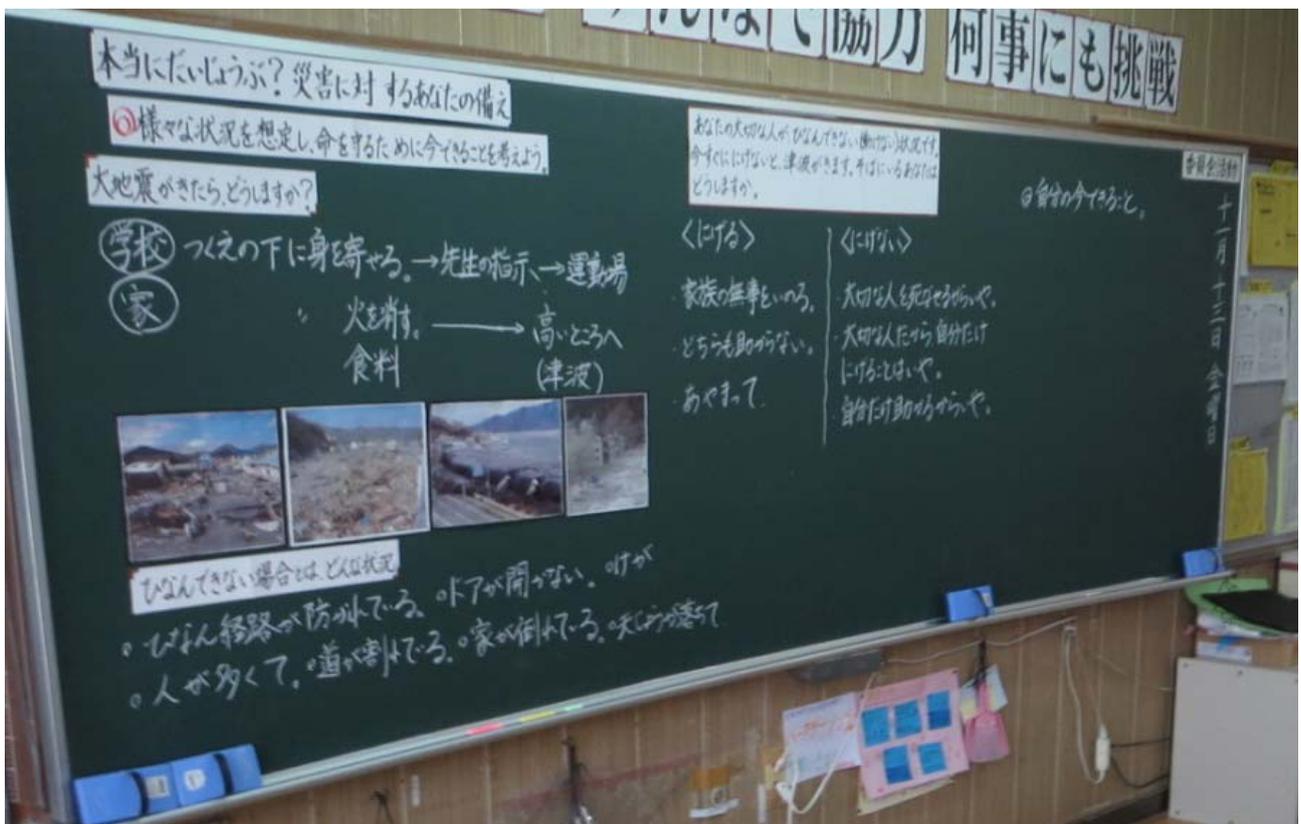
太田 皆さんが、命を失ってしまうかもしれない状況をしっかりと考えてくれたから、涙が出てきたんですね。ちょっと見てね。逃げる人も、「自分の命がやっぱり大切だから逃げる」っていうのもあるんだけど、家族の無事を祈ったり、どっちも助からないけど謝っておくって言うていたよね。要するにこの結果は、みんなにとって幸せですか。「自分の命が助かった」のだから、幸せだと思う人。幸せではないと思う人。幸せじゃないよね。

じゃあ、逃げない人はどうかな。「大切な人を置いて、自分だけは逃げられない」、先生もそうです。先生も子どもが同じような状況になったら、そのままにしてとても逃げられない。大事な人だから置いていけない。でも、こっちを選ぶと、一緒に命を落とすわけでしょ。「かわいそうだから、大切な人と一緒に流される」、これは幸せですか。幸せじゃないよね。

この状況になっちゃたら、両方とも幸せじゃないよね。だけど、幸せじゃないことだけ、今しっかりいやな事を考えられるのは、「生きているから」でしょ。今皆さんが生きているから、考えられるんですよ。こうなりたくないよね。

じゃあ、今皆が命を守るためにやっていること、避難訓練だったり、家で準備しているものだったり、そういうのは本当に今の状況で大丈夫ですか。

最後に、自分の今できることを書いてください。これまでの避難訓練を振り返ったり、お家で準備しているものを考えたりして、いろんな原因を探ったなかで、こういう目に遭わないために、今しなければならないこと、今だからできること、今だから考えられる自分の命を守るためにできることを書いてください。



授業の最後のまとめ部分を切り出して見ていただきました。授業の最後の問いかけは、「命を守るためにどんな備えが必要ですか」ということでした。ここだけ見ると、『命を守るための備えを考える授業』です。このようなねらいの授業は、これまで、多くの先生方も実践されたことがあると思います。でも、その途中で、一体どれほど「子どもたちにリアリティ」を持たせることができたのか、「自分に関係する大事な問題なんだという意識」を持たせることができたのか、それを持たせないと実行力は低いです。この授業は、大切な人の命を考えることを通じて、子どもたちの“リアリティ”や“わがこと感”を高めることをねらったわけです。そのため、このようなちょっと厳しい問いかけになってしまい、子どもたち、そして、実践された先生は大変だったと思うんですけど、この授業を参考に、「こういう問いかけはどんな効果があるのか」とか、またはその課題とか、同様の効果をねらった場合に他にどのような問いかけが考えられるのか、といったことを具体的に議論していただきたいと思います。

ということで、資料にある二つのテーマについてグループディスカッションをお願いします。

一つ目のテーマについては、「あそこまで子どもを追い込んでいいのか」という点についても議論があると思います。そういうことも含めて、通り一辺倒の「逃げましょうね」、「は〜い」という授業ではなくて、『防災』という課題を通じて、自分の命、家族の命に真剣に向き合えることを促すような授業、問いかけ、実践は、どんなのがあるのかを議論して頂きたいと思っています。

それから二つ目のテーマについては、午前中の座談会、午後の事例発表で紹介されていたように、『防災』を題材として家庭や地域と連携した実践的な学習を行うことによって、防災以外の面でも、子どもたちの様々な成長、効果がみられる。であるならば、そのような成長を効果的に引き出すためには、どのような実践、連携のあり方が求められるのか、という点について具体的な議論して頂きたいと思っています。

グループ分けについては、グループ1から4までが小学校グループ、グループ5から9までが中学校グループとなっています。このあと、グループディスカッションを踏まえて、全体で議論させて頂きたいと思っておりますので、それぞれのグループで議論した内容について発表してもらいますので、準備をお願いします。